

＜「都議会情報」令和2年9月7日号（1290号）から抜粋＞

各派幹事長に聞く 山崎一輝氏（自民）

小池知事には柔軟に対応

—幹事長就任の率直な感想。今後の抱負は。

山崎一輝幹事長 来年の都議選を控えての執行部ですから、大変重要な1年になると思います。重責であることを自覚しています。リーダーとしてみんなをしっかりとめてやるのが第一です。

—都議選が最優先ということでしょうか。

幹事長 いや、最優先なのは政策ですよ。都政の課題は何かと言えば、コロナ対策です。これはオール都庁で取り組むものだし、オール都議会で臨むべきものです。安全安心を都民や国民にしっかり提供する立場ですから、スピード感を持ってコロナ対策に取り組まなくてはと思います。

コロナ対策やその他、様々な施策において、「都民が何を望んでいるか」をしっかりと把握する必要があります。我々は区市町村や国としっかり連携が取れるという強みがあります。

地元で様々な意見を頂きながら活動しているので、都民が今、何を望んでいるのかをしっかりとキャッチしています。それを踏まえて、様々な提案をスピード感を持って提案したいです。

都のコロナ対策ですが、協力金を支給することは悪い話ではないし喜んでい事業者も大勢います。しかし、これでいいのか、効果はあったのかというと、しっかりとした検証が求められます。

コロナの収束が見えない中、これからは倒産するところが増えてくるでしょう。倒産をどう防ぐのか、どう救うのか、これが3定のひとつの争点だと思っています。

—新型コロナウイルスが都財政に与える影響も大きくなりそうです。

幹事長 コロナ対策で東京都も幾度か補正予算を編成したことで財政への不安があります。おそらく来年の都税収入は間違いなくマイナスでしょう。都税収入の落ち込みをどのように補てんするかが今後の大きなポイントですね。限られた財源のなかでやっていかなければ。

コロナによってそれまでの状況が全く変わってしまったから、今後施策の優先順位をどうつけていくのか、再検討する必要があります。今一度、お金の使い方を考え直さないかね。今すぐやらなくてはならないことと、少し時間をおいてからやるべきこと、こうしたものが出てくるのは当然だと思います。

—2期目を迎えた小池知事に対する評価は。

幹事長 小池都政は2期目を迎えたわけで、366万票を獲得して再選されました。この民意について我々はしっかりと受け止めなくてはならないと感じています。

—知事選ではぎりぎりまで独自候補の擁立を掲げていました。しかし現実には断念という結果になりましたが、これは候補が見つからなかったということでしょうか。

幹事長 都連の選考委員会では候補者を擁立できなかった。「見つからなかった」というより、「見つけることが出来なかった」という表現の方が確かでしょう。水面下では候補者の擁立に向けて我々も汗をかいてきたつもりです。

結果としては都議会、都連、党本部として候補者を擁立することはできませんでした。私個人としては擁立できなかったということを踏まえ、今現在に至っているという心境です。

—一般会計予算案の賛否については、1年前は反対しましたが、今回は賛成に回りました。この理由について改めてご説明頂けますか。

幹事長 今回、賛成に回ったのは、ちょうどコロナの問題も大きくなってきたということもありました。我々も小池知事と対立してきましたが、その中で当時、また知事選の候補者の選定にも至っていない時期でしたが、ギリギリの交渉をしていくなかで、都民生活を止めてはならないということ、築地のまちづくりについて我々が求めたように見直す姿勢を見せたこと、こうしたことがカギとなって予算案に賛成するということになりました。

当時、我々は「選挙と予算は別だ」と主張していました。その後、選挙の話が動き出したわけですが、とにかく都民の利益、生活向上のために予算に賛成すべきだ、築地のまちづくり計画の見直しということで賛成に回りました。都側と取引をしたというのではなく、「見直す」という答弁を得たことがカギとなったのです。

—このことで知事との溝は埋まったのでしょうか。小池知事に対するスタンスも変わると。

幹事長 柔軟な対応をしていくことになるでしょうね。これからは「スマートな協調関係」を心がけたいです。柔軟という意味も入ります。

—これからは我々の提言を施策や予算に反映してほしいということでしょうか。これからは「反小池」の野党ではないということですか。

幹事長 そうですね。勿論是々非々ではあるけれど、小池知事の資質とか、言った言わないの水掛け論とかいう議論が望まれているのかということです。都民の利益になっているのかどうかを考えなくてはと思っています。

今回の知事選の結果を重く受け止めているというのはそういうことです。ただ、小池知事はどう考えているのかわからないからね。

3日に小池知事と面会した際、コロナ問題について「オール都庁で臨む」と述べていたので、私は「議会も含めた上でのオール都庁だ。我々は本予算にも補正予算にも賛成している。このことはしっかりとらえて頂きたい」とはっきり申し上げました。

7月27日、臨時会が終わった直後に条例案が専決処分されました。「知事から各会派に説明はありましたが、条例の案文が示さなかったのはいかななものですか。議会対応はどうなっているんですか」と、これもはっきり申し上げました。

コロナ対策はスピード感を持つことが大事なことは理解します。しかし議会対応を疎かにするのは違うと思いますね。小池知事は「わかりました」と述べていました。

また三宅正彦政調会長が領土領海の話をして、知事にもしっかりと認識してほしいとお願いしました。

小池知事は「議会対応と今のお話は真摯に受け止める」と発言していました。知事選での勝利について「おめでとうございます」とも言いましたよ。

—知事選と同時に都議補選も行われ、自民が4議席を獲得しました。

幹事長 4つの補選すべてで勝つことができ、新たな仲間4人が加わったということは率直にうれしいことです。この数年間、私個人としては一番明るいニュースですよ。

補選で勝つには我々自民党の力だけでなく、公明党さんの力も頂きました。これは都議会、都連のレベルではなく、自民党と公明党の党本部による高度な協議もあって推薦を頂いたことが大きいですね。

都議会では国政よりも自公連携の歴史は長いですから、これまでの歴史をしっかり重視したい。

—公明党との関係の修復にも意欲的です

幹事長 来年の都議選はというと、これも両党の都議会レベル、都連レベル、党本部レベルで、補選で勝ったという事実をしっかり受け止めて、今後につながるのかなと。各選挙区での公明党さんとの連携は必須かなと感じているところです。各レベルでの両党の協議はこれからスタートするのかなと。

—公明の東村幹事長との協議はこれからですか。

幹事長 私は私なりのやり方でやっていこうと思っています。一時期ぎくしゃくしたことはあったけれど、それはしこりというものではないよね。今までとは変わった形で、うまく関係が構築できればと考えているところです。

かつての自公連携は理想でもあり、国が自公連立政権でやっている中、東京も国との色々な連携が求められます。地方議会においても自民党と公明党で過半数がとれるようになるのは理想というか当然です。

東村幹事長もおそらく同じように考えているのではないかと思いますよ。東村先生は私より先輩だし経験も豊富です。私はきちんと礼を尽くしたい。

—一方の都民ファーストの会との関係は。

幹事長 都民ファーストの会は都議会の第一会派なのですから、議長も含め、議会運営を円滑なものとしてほしい。常任委員会の運営などでも第一会派としてしっかり準備してほしいと思います。

自民党も第一会派だったことがあります。丁寧な委員会運営を心掛けてきました。提案などをいきなり出してくるのではなく、事前からの調整が必要だと思います。

—去年の予算特別委員会は運営をめぐる大混乱になりました。

幹事長 あの時のことは我々も考えなくてはいけないことがありました。都民ファーストの会も同じです。

誰が見たって普通の状態ではないということはわかると思います。それぞれが改善して、良いものとするのは当然ですね。

—来年の都議選ですが、公認候補者数はどれくらいになるのでしょうか。

幹事長 3日に一次公認で40名を発表しました。今の段階で公認候補者はどれだけとは言えないけれど、最終的には公認候補者全員の当選を目指すことになります。来年の都議選では「挑戦そして復活」というスローガンを掲げて戦います。

—最低でも第一会派を狙う？

幹事長 まあ、挑戦者である我々がそんなこと言っているのかというところはあるけれど、全員当選を目指すのであれば、当然そういうことになるのかなと。

—自公で過半数とれるかどうかで来期の都議会も変わってきそうです。

幹事長 そうだろうね。自民党が議席を増やせば、その分どこかが議席を減らすことになるでしょうね。自公で過半数ということより、我々はまず、全員当選を目指したい。その結果、どのような議会構成になるかでしょう。

—幹事長は就任会見で、政策面については特に防災対策について触れていました。

幹事長 コロナだけでなく、自然災害が全国各地で発生しています。去年の台風19号の時、私の地元、江東区で避難勧告が発令されました。区内の各避難所を見て回りましたが、地震の時と豪雨の時では対応が異なるという事を率直に感じました。学校などの公的施設の活用など、色々な課題が突き付けられたと思います。

また、国がコロナ対策で感染症に伴う避難所の運営のあり方で指針をまとめました。先日、江東区でも感染症を含めた避難所の運営について訓練を行っています。

日本各地で災害が起こっている中、行政の大きな力は今後ますます必要とされていきます。ダムにかわる治水を主張する声もありましたが、去年の台風19号で、その必要性は改めて認識されたと思います。

やはりインフラの整備は安全安心のためにも欠かせないものだとなつくづく思いました。災害対策は今後、我々も一丁目一番地にするつもりでやっていきます。

—コロナの収束が見えない中、五輪は間にあうのでしょうか。

幹事長 ワクチンができたとしてもそれをどのように国民に投与できるのか、色々な課題はありますが、今の状況で五輪ができるかといえば、非常に厳しいのかも知れません。ただし、幸いなことに日本では感染者数、重症者数、死者数をみれば、世界と比べて一桁も二桁も数が少ないのです。ここで諦めてはいけないんだと思う。

この閉塞感を打ち破るには、オリンピックは大切なものだと思います。人の命と比べて云々ということではなく、開催都市の東京が簡単に諦めてはいけないんだと。ただし、決定したことにはしっかりと対応しなくてははいけません。

仮に開催できなかったとしたら、費用の問題が大きくのしかかってきます。開催するにしても、新型コロナウイルスという、まったく想定してこなかった問題に対応する費用が必要です。

東京五輪は「復興五輪」という位置付けで開催されますが、日本だから、東京だから、コロナ禍の中にあっても開催できれば、間違いなく五輪の歴史に残るでしょう。世界中で最も印象に残る五輪になると思います。我々が諦めてはいけないんだと思います。

